

学校教育目標		重点目標		重点目標		①知識や技能を日常生活の中で使える生徒 ②自分の生活を振り返り基本的な生活習慣を自己点検できる生徒 ③自分たちの学校生活を自分たちでよくするための活動ができる生徒			
志を持って、心豊かに自ら学び、持続可能な社会を拓く生徒の育成									
評価計画と自己評価				学校関係者評価					
重点目標	目標達成のための方策(取組指標)	めざす生徒の姿(成果指標)	評価	結果(成果○と課題△)	評価	コメント	改善計画		
重点目標	<重点1> 知識や技能を日常生活の中で使える生徒	○生徒自ら課題を設定し、課題の解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの活動を取り入れる。 ○生徒が調べたことや考えことを分かりやすく文章に書かせる	○学級やグループの中で自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表する生徒。 ★生徒アンケート目標値 <★3. 4> ○自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表する生徒。 ★生徒アンケート目標値 <★3. 1>	2 3	○「わかる・できる」からもう一歩進んだ生徒が見られた。自分から学習に取り組むようになってきている。 ○話し合い活動はなかなかできない分、授業中に書く活動の時間を確保することができた。 ○めあてに対するまとめの時間をとることで一人一人の考えや思いを知ることができた。 ○自分の考えを自分の言葉で表現できるようになった。 ○道徳等で自分の意見をしっかり考え発表し、それを周りはしっかり聞くことができています。 △コロナ感染防止のため、授業中の交流活動を工夫し、深い学びにつなげる工夫が必要である。 △生徒が自ら課題を設定し、課題解決するような授業を設定する必要がある。 △情報収集力や課題解決に必要な知識(情報)の活用力を高める必要がある。	A	・自己評価は適切である。 ・体育授業発表会などで見られた工夫は素晴らしいと思う。 ・書く時間やまとめる時間を確保する等、書くことに時間を要する生徒への配慮も感じられた。 ・英語・数学をはじめ学力の伸びが見られるのは少人数指導の効果もあるし、なにより教科担当者のよりよい授業づくりへの意欲と実践の成果もあると考える。 ・コロナ禍の中、生徒達が目標達成できるように工夫をされていたのがよかった。自分の考えで自分の言葉で表現できるのはすばらしい。 ・コロナ禍で話し合う活動が少なくなった分だけ、自分の意見を書く時間が確保でき、自分の考えを書いて表現できていたと思う。	・生徒に配布されるタブレットや電子黒板の活用法について考え、交流の活性化や個別最適化の学習ができるよう取り組む。 ・活用場面の授業を行い、その発展として家庭学習課題に取り組ませたり、レポート課題等を単元のまとめに設定したりする。 ・校内研修を通して、生徒達が自ら課題を設定できる具体的で段階的な手立てを提案する。 ・校区小中連携協議会を効率的に活用し、資質・能力を9ヵ年を見通し段階的に育成する。	
	に 対 す る	<重点2> 自分の生活を振り返り、基本的な生活習慣を自己点検できる生徒	○学習規律(私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守るなど)を徹底する。 ○自らが設定する課題や教員から設定される課題に対して、自ら考え、取り組ませる。	○学校の規則(学習規律)を守る生徒。 ★生徒アンケート目標値 <★3. 6>	3 3	○生徒同士で声をかけ合って学習規律を作っている学びに向かう態度が身に付いてきている。 ○挨拶や時間を守る等の生活態度を身に付けるために、生徒会活動を中心に主体的に取り組むことできた。学習委員会の取組も効果があり、ノーチャイムの中で、時間を意識して生活できるようになった。 △松原ノートを通して自主的な家庭学習は定着したが、内容が単調な生徒への指導が必要である。 △学習規律は学習指導の基盤であるため、定着に向けた更なる指導の徹底が必要である。	A	・自己評価は適切である。 ・コロナ禍において、生活リズムのメリハリがつけにくくなっている中、ノーチャイムの取組と成果は嬉しい。 ・生徒同士が声を掛け合う雰囲気が出てきているのだなと思った。子どもたちが時間をしっかり見て行動することが出来るようになった点から成長を感じた。 ・生活習慣を自己点検できる生徒、挨拶や時間を守る生徒となるよう取組が生徒中心に行われており、とても大事な取組であると思われる。	・生徒会活動等を通して、生徒主体で学習習慣を身につける活動を取り入れる。 ・自分の考えを表現できるようディベートに段階的に取り組む。 ・小学校の大正ノート・中友ノートと関連した段階的な取組を行うとともに、低学力の生徒には個別の問題の提示など松原ノートの内容の工夫を行う。
	評 価	<重点3> 自分たちの学校生活を自分たちでよりよくするための活動ができる生徒	○学級運営の状況や課題を全教職員間で共有し、学校として組織的に行う。 ○授業において、生徒の間で話し合う活動をよく行わせる。 ○生徒会活動を積極的に支援し、自主的な実践力を高める。	○学級のみんなで協力して何かやり遂げ、うれしかった経験を持つ生徒。 ★生徒アンケート目標値 <★3. 5> ○友だちと話し合う時、友だちの話や意見を最後まで聞くことができる生徒。 ★生徒アンケート目標値 <★3. 6> ○友だちの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりできる生徒。 ★生徒アンケート目標値 <3. 3>	3 2 3	○生徒会活動は、生徒自ら考え行動する場として、生徒の企画内容を尊重し、運営面では後方支援に徹している。 ○学級をよりよくしよと、自主的に行動する生徒の姿が増え、学級内に自治的な取組が見られ始めた。 ○生徒会活動に子どもたちが協力して取り組んでいる。 △コロナ禍の状況で、行事等縮小したため、生徒の自主的な活動の機会が設定しにくい状況であった。 △教師側から指示を出すとよく行動できるが、生徒間で互いに声をかけ合いながら取り組むことができる関係づくりが必要である。 △職員間の情報共有を効果的に行い、全職員でさらに共通理解できる仕組みが必要である。	A	・自己評価は適切である。 ・日頃から先生方が生徒を信じて、サポートされていることがよくわかる。合唱等で3年生の歌を他学年に聴かせる機会があったのは、取組の工夫が感じられた。 ・生徒会活動が活性化され、SDGs/ESDを生徒が主体となって推進することができるようになってきていると思う。今後に期待する。 ・学力テストの成績があがってきているのは、先生方の日々の授業改善などへの意識の高まりと実践の成果だと思う。	・コロナ禍でも行うことができるように行事の工夫を行い、目標を持たせ、生徒会活動や学級活動で役割を担わせ実践できるようにする。 ・委員会のコンクールや調査で終わることなく、結果を基に改善計画と実行を行うようにする。 ・各委員会での取組の見直しや委員会間の取組の調整と精選を行うことで、より委員会活動の活性化を行う。
い じ め 防 止	いじめに気づき、いじめをしない、いじめを許さない生徒 【絆づくり】	○いじめを生まない学級・学年づくりに努める。(認知) ○生活アンケート等を定期的に行い、早期発見に努める。	○「友だちとの関係」相手の立場に立って行動できる生徒。 ★生徒アンケート目標値 <★3. 5> ○いじめに気づき、いじめをしない生徒。 ★生徒アンケート目標値 可能性<★2名> 訴え<★0名>	3 3	○定期的な生活アンケートやいじめアンケートをもとに、早期発見・早期対応、未然防止に努めることができた。 ○教師側が生徒に積極的に話し、生徒の変化にいち早く気付くよう心がけてきたことで、生徒も教師に話せるような関係性をつくることができた。 △生徒ともっとゆっくり話す時間を作り、様々な悩みや相談等に丁寧に対応できる体制づくりが必要である。	A	・自己評価は適切である。 ・いじめの問題は、SNS等が発達している中では、顕在化しにくい部分もあるので、継続して指導していただきたい。 ・会議の場で、いじめの件数や内容、その後の経過などを報告されている所から、日頃から組織として未然防止に取り組み、対応もきちんとなされている。	・アンケート結果や日頃の生活の様子の変化を教員間で情報共有し、早期発見・早期対応・未然防止に努める。 ・考え議論する道徳や学級活動の授業改善を通して、いじめについて生徒達で改善方法を議論ができるよう工夫する。	
不 登 校 対 策	自他の良さに気づき、夢や目標を持つ生徒 【居場所づくり】	○①生徒の良いところを見つけ、 ②生徒に将来の夢や目標を持たせる。 ○生徒の気持ちを理解し、相談にのり、生徒を励ます。(教師との関係)	○①自分の良いところ気づき、 ②将来の夢や目標を持つ生徒 ★生徒アンケート目標値 <★①3. 0> <★②3. 3> ○学校への登校意欲を持つ生徒 ★生徒アンケート目標値 <★2. 7>	3 3	○子どものよい面をいろいろな形で伝えることで、生徒はいきいきと活動できるようになってきている。 ○不登校の生徒と関係機関と連携しながら進路指導ができた。さらに、3年生は進路指導を通して学校に登校できたり、クラスへ入って授業を受けたりすることができた。 ○SC・SSW・外部機関等との連携により生徒理解や生徒支援をすることができた。 △不登校の生徒に対する一人一人に応じたきめ細かな対応がさらに必要である。	A	・自己評価は適切である。 ・不登校の生徒については、引き続き保護者と連絡を取りながら対処していただきたい。地域の民生委員、主任児童委員は家庭の諸事情を把握している場合もあるので、連携して問題解決していくことも必要だと思う。	・教育相談、生徒支援を中心に不登校生徒に継続的に対応できるようにするとともに、登校した時に個別対応できる職員が不足しないように配置する。 ・自己肯定感を高めるため、教師の賞賛と生徒同士の認め合う活動を計画的に設定する。	
働 き 方 改 革	働き方改革の指針に沿った取組	①定時退校日の設定、取組(毎週水曜日) ②部活動休養日の設定、取組(毎週水曜日、土曜日・日曜日のうち1日以上、長期休暇中の一定期間) ③学校閉庁日、閉庁時間の設定、取組(8月13日～16日・12月27日～28日、閉庁時間を20時) ★実績目標値 <★前年度比10%削減・★超過勤務月平均45時間以内>		2	○ICTによる時間管理の導入により、以前より職員の時間への意識が高まった。 △働き方改革推進委員会の定期的な開催により働きやすい職場作りを進めていく。 △コロナ禍の中、行事や中体連などの部活動の大会が2学期に集中し、超過勤務が増えてしまった。	A	・自己評価は適切である。 ・コロナ禍で、先生たちの負担の増加がメディアでも取り上げられた。変化が多いと負担も多くなると思う。そんな中、時間を意識し、よく取り組まれている。 ・先生方のハードな勤務は、心身ともに疲弊する可能性がある。勤務時間など特定の先生に負担がかからないよう協力しなから取り組む職場作りを行ってほしい。	・校内働き方改革委員会において、超過勤務の原因の聞き取りと改善方法について議論し、提案していく。 ・定時退校日と部活動休養日を工夫するとともに、部活動顧問の二人体制による指導の工夫を行う。	

◇ 評価について
 【自己評価】 4:目標達成(90%以上) 3:ほぼ達成(70%~90%) 2:もう少し(60%~70%) 1:できていない(60%未満)
 【学校関係者評価】 A:自己評価は適切である B:自己評価は上方修正すべきである C:自己評価は下方修正すべきである